

大地の絆通信



JA愛知東(愛知県)助けあい組織「つくしんぼうの会」

セーフティネット

高齢化率が高い中山間地。家に閉じこもりがちなお年寄りに元気になってもらおうと、JA女性部員のグループが助けあい活動に精を出す。農産物直売所や教育機関とも力を合わせ、地域の暮らしを支えるセーフティネット機能を担う。

もう一度、「JAの力」を 考えてみる

JAの可能性を探る

高齢社会、包括ケアで備え JAがけん引役に



さわやか福祉財団理事長、弁護士
堀田 力氏

1934年、京都府生まれ。61年に検事任官。東京地検特捜部検事時代にワッキード事件を担当。91年に退職し、弁護士登録。著書に「おこるな上司!」「中年よ、大志を抱け」「少年魂」など。

地域の助け合いで 高齢者に安心感

日本が本格的な高齢社会を迎え、進むべき方向は、地域包括ケアの仕組みをつくることだ。これは、高齢者に最後まで自宅で暮らしていただくよう、地域の皆で力を合わせてできるかぎりのことをやってみようという。日常生活の範囲に看護ヘルパー・ボランティアなどがあり、そこからヘルパーが各家庭へ出向き、支援する。

包括ケアは、平素から人と人とのつながりができない。身近なことでは、各戸を開放し、訪ねて茶飲み話をする居場所にしてほしい。地縁がある農村部なら、人とのつながりが生まれ、初めて助け合えるようになる。次に隣の家まで30分かかるような孤立した家の場合、何人か集まる共同生活はどうだろう。孤立した1戸1戸をヘルパーが巡回するのは限界があるから。これは、地域の信頼が厚いJAが進めてほしい。JAが集合住宅を用意し、買い物や病院への移送サービスもする。先祖代々の墓があるから家を離れない、といった高齢者には、墓参り巡回バスも提供する。年を取っても最後まで、地域で安心して生活するには、そこまで必要だ。

加えてJAに期待するのは、助けあいグループによる、きめ細かい対応だ。JA愛知東女性部のミニデイサービスや家事援助、これがないと地域包括ケアは実現しない。介護保険の対象外で身体的なケアが必要ではない高齢者も、気持ちが悪かったり心細かったりする。仲間と交流することで心のケアにつながるし、高齢者の家を訪ねれば、草取りや食事など手伝うことが山ほどある。ご近所同士の助け合いの役割を、JAが果たす。

女性の力を取り入れ 地域密着事業を

医療、介護とも地域包括ケアを進める方向へ動き出す中、JAも率先して参加するべきだ。包括ケアの形は各地域で変わってくる。地域、農家をよく分かっているJAならば、求められるものをどんどん取り入れて、地域に合った仕組みづくりへけん引できる。

JA全国連 統一広報

大地がくれる絆を、もっと。

JAグループは、人と人をつなぐ協同組合組織。その根っこにある思想は「地域に根ざした総合事業体」です。誰かが困っていたらみんなで助け合い、みんなで元気に、安心して、暮らしたい。それがJAグループの思いであり、使命です。

JA全国連統一広報は、「大地がくれる絆を、もっと。」を掛け声に、私たちJAの価値や役割を発信していくプロジェクトです。各地域でのJAの取り組みを、農業に携わる人たち・地域に住む人たちに紹介することで、理解を深めていきます。

JAきずな 検索 <http://ja-kizuna.jp/>

いまだからこそ発揮される「協同の力」 東日本大震災以降、JAグループは経済・信用・共済・厚生などの総合力をもって、被災地のJAや組合員、地域の人々に向けて、人的・物的な災害支援を展開しています。お互いに助け、支え合う「協同の力」が発揮されています。

大震災にかかるJAグループの取り組み①

JAグループは、震災当日には、災害対策緊急中央本部を設立。農業・JAにかかる被害状況の把握、関係機関との連携、農業・暮らし・地域社会に対する復旧支援活動の実施に取り組むことを決めました。

全国のJAからは、支援物資が続々と集まりました。被災地近隣県からは、現地に入った積極的な炊き出し支援などが展開されました。また事業ごとにも支援策に取り組みました。

経済事業では、一刻も早い現地の復旧のため、自衛隊・警察・救急・消防などの緊急車両への燃料を供給、また、家畜用飼料を確保するため、北海道や九州方面からの製品輸送を行いました。さらに、被災した農業者が購入した飼料・肥料・農業代などの支払期限をJAが延長する場合、JA全農はJAに対して、支払期限の延長または金利の助成を実施しました。

共済事業では、被災者に対して新聞などのメディアやホームページで共済契約の取り扱いを案内するとともに、相談窓口を開設しました。また、1,000人以上の規模で損害調査を実施し、迅速な共済金支払いに向けて取り組んでいます。

信用事業では、震災後すみやかに、被災者からの金融サービスにかかる相談窓口を設置し、貯金の支払い業務や融資相談などを受け付けています。また、第一次産業の復旧・復興支援のため、総額1兆円規模の復興支援プログラムを打ち出しています。

厚生事業では、医師・看護師による災害派遣医療チーム(DMAT)が、震災当日の夜には出発、海上自衛艦やヘリコプターを乗り継いで被災地に入り、救急治療に当たりました。道県、医師会・看護協会などと連携し、5月9日現在、15厚生連46病院などから、医師・看護師など448人を派遣しました。

これらの取り組みは、協同の力と事業の総合性を活かしたものであり、エリアを越えて、今後の復旧・復興に対してJAグループの力を発揮しています。

Present 味わい豊かな梅酒プレゼント
抽選で10名様にJA愛知東の梅原酒「矛盾」(720ml)をプレゼントします。

①②を明記の上、宛先までお送りください

①この特集の感想やJAへの期待
②住所・氏名・年齢・職業

宛先：〒110-8722 東京都台東区秋葉原2-3 日本農業新聞「大地の絆通信」プレゼントD係 6月28日(火)必着

地域全体で高齢者を守っていく

25カ所でミニデイサービス 院内ボランティア、家事支援も

中 山間地が多い愛知県北東部は、県内でも高齢者の割合が高い地域だ。JA愛知東の女性部員らでつくる「つくしんぼうの会」は、お年寄りに元気に、楽しく暮らしていただくべく、お年寄りに寄り添う活動を行っている。

「この日が楽しみですね。昨日も寝られなかったよ」。市内陸平地区で、会が開くミニデイサービスに参加した金田都子さん(65)は言う。

ミニデイサービスとは、介護保険のデイサービスを利用するほどではないお年寄りが、地域の公民館や集会所に集まり、手芸やゲーム、食事を共にしながら交流を深めるもの。

金田さんら10人は午前中、会員の手ほどきで和紙のひな人形をつくった。「ちよと手伝つてくれん。不器用でなあ」「そんなことない。上手にできるとよ」「そうかん笑」。会場である陸平老人憩の家に

3時になると「楽しかった」とそれぞれの家路と向かっていった。こうしたミニデイサービスを公民館や集会所などを利用して25カ所、年間延べ193回(平成22年)という高い頻度で開く。参加者は3200人に及ぶ。

ホームヘルパーの有資格者40人の女性でつくる会の活動は多岐にわたる。加工施設と集会所を兼ねる「つくしんぼうルーム」では、弁当や加工品を作

「財政悪化で診療科目が縮小する現状を目の当たりにし、私たちができることがないかと考え始めました」と会の荻野孝子会長(68)は言う。JA管内には、東栄町、設楽町、豊根村でミニデイサービスを展開するドレミの会も活動中だ。

つくしんぼうの会は、地域に暮らす人々を有機的に結び、役割も果たしている。食材は地元農家や直売所から仕入れて使う。市内の小学校に声をかけ、生徒たちがゆとり授業の時間を利用して、ミニデイサービス会場を訪れ、お年寄りに紙芝居を披露したり、一緒にゲームをしたりする。市内の障害者施設とも連携し、施設内で栽培するシイタケを会の弁当に使ったり、

「この日が楽しみですね。昨日も寝られなかったよ」。市内陸平地区で、会が開くミニデイサービスに参加した金田都子さん(65)は言う。

ミニデイサービスとは、介護保険のデイサービスを利用するほどではないお年寄りが、地域の公民館や集会所に集まり、手芸やゲーム、食事を共にしながら交流を深めるもの。

金田さんら10人は午前中、会員の手ほどきで和紙のひな人形をつくった。「ちよと手伝つてくれん。不器用でなあ」「そんなことない。上手にできるとよ」「そうかん笑」。会場である陸平老人憩の家に

3時になると「楽しかった」とそれぞれの家路と向かっていった。こうしたミニデイサービスを公民館や集会所などを利用して25カ所、年間延べ193回(平成22年)という高い頻度で開く。参加者は3200人に及ぶ。

ホームヘルパーの有資格者40人の女性でつくる会の活動は多岐にわたる。加工施設と集会所を兼ねる「つくしんぼうルーム」では、弁当や加工品を作

「財政悪化で診療科目が縮小する現状を目の当たりにし、私たちができることがないかと考え始めました」と会の荻野孝子会長(68)は言う。JA管内には、東栄町、設楽町、豊根村でミニデイサービスを展開するドレミの会も活動中だ。

つくしんぼうの会は、地域に暮らす人々を有機的に結び、役割も果たしている。食材は地元農家や直売所から仕入れて使う。市内の小学校に声をかけ、生徒たちがゆとり授業の時間を利用して、ミニデイサービス会場を訪れ、お年寄りに紙芝居を披露したり、一緒にゲームをしたりする。市内の障害者施設とも連携し、施設内で栽培するシイタケを会の弁当に使ったり、

持続性ある組織に 行政に財政縮小の波 JAが全面支援

つ くしんぼうの会は、JAグループの後押しでスタートした。農村地域を多く抱えるJA組織は、高齢者福祉事業に早くから取り組み、JA女性組織を中心にホームヘルパーの養成してきた。こうして誕生したヘルパーたちが各JAで助けあい組織を誕生させた。

つくしんぼうの会もそのひとつで平成10年に設立。行政や社会福祉協議会を訪問し、活動の趣旨に理解を得ながら、手探りで活動を開始。13年からは行政からの委託で、ミニデイサービス事業を拡大していった。

だが助けあいだけでは収益性が低く、「収益事業にも取り組む必要がある」「弁当や加工

品を作って販売したい」という声を持ち上がった。支援の手を差し伸べたのがJA愛知東。JAの倉庫だった建物を改装して「つくしんぼうルーム」をつくらせた。現在、会の活動の拠点になっている。

河合勝正組合長(62)は「行政の財源縮小で、高齢者を地域全体で守っていくしかなくなった。つくしんぼうの会が高齢者対策に取り組むと聞き、喜んで応援することにしたい」と目を細める。

会の運営は、ミニデイサービス(参加費一人1000円)や家事援助などの収益のほか、行政からの委託費、JAからの支援金で賄う。しかし「行政からの支援が削減されても成り立つようにしていきたい」と荻野会長は力を込める。

特産品の開発・販売にさらに力を入れ、6300円にとどまる会員の時給を800円に上げるのが当面の目標だという。JAや行政のサポートを背に受け、助けあい事業と収益事業の両立を図り、持続性のある組織づくりに邁進する。

フリージャーナリスト 青山浩子

「皆で集まれば話はずむ」「和紙のひな人形。綺麗な仕上がりに、参加者も満足」「保健師の講話のあとは軽い運動。体を動かして、健康にも気を遣う」「壁に掲げられた仕事の訓示。「人と接する時は春のような暖かい心で」「弁当づくりに励む女性部のメンバー」「軽い運動で、指を動かす」「7 倉庫を改装した加工施設「つくしんぼうルーム」では和菓子づくり。地元産の材料をたっぷり使う

「財政悪化で診療科目が縮小する現状を目の当たりにし、私たちができることがないかと考え始めました」と会の荻野孝子会長(68)は言う。JA管内には、東栄町、設楽町、豊根村でミニデイサービスを展開するドレミの会も活動中だ。

つくしんぼうの会は、地域に暮らす人々を有機的に結び、役割も果たしている。食材は地元農家や直売所から仕入れて使う。市内の小学校に声をかけ、生徒たちがゆとり授業の時間を利用して、ミニデイサービス会場を訪れ、お年寄りに紙芝居を披露したり、一緒にゲームをしたりする。市内の障害者施設とも連携し、施設内で栽培するシイタケを会の弁当に使ったり、

「財政悪化で診療科目が縮小する現状を目の当たりにし、私たちができることがないかと考え始めました」と会の荻野孝子会長(68)は言う。JA管内には、東栄町、設楽町、豊根村でミニデイサービスを展開するドレミの会も活動中だ。

つくしんぼうの会は、地域に暮らす人々を有機的に結び、役割も果たしている。食材は地元農家や直売所から仕入れて使う。市内の小学校に声をかけ、生徒たちがゆとり授業の時間を利用して、ミニデイサービス会場を訪れ、お年寄りに紙芝居を披露したり、一緒にゲームをしたりする。市内の障害者施設とも連携し、施設内で栽培するシイタケを会の弁当に使ったり、

JAの助けあい活動 地域の福祉を支える

本格的な高齢社会の到来に伴い、医療・介護・福祉のセーフティネットの維持は、国民的な課題だ。地方経済の衰退や財政難から公的福祉サービスの後退が懸念される中、JAの地域セーフティネット機能が存在感を強めている。

その代表例は女性組織による「JA助けあい活動」。高齢者へのミニデイサービスや配食サービスなど、公的保険ではカバーされない生活支援に取り組む。孤立しがちな高齢者の生きがいや心のケアにも役立つ。国が進める、病院や介護施設などと連携した「地域包括ケア」システムの構築で、JAは大きな役割を果たしている。



素人でも知恵を絞って活動すれば 利用者に喜んでもらえる

一 お年寄りの反応はどうか?

ミニデイサービスの参加者の中に「これだけが楽しみ」と言ってくれる方がいてやりがいを感じます。地域には一人暮らしの人、「一日中誰とも話さない」という人が多い。せっかく参加した人に「次もまた来よう」と思ってもらえるように、会員間の決めごととして「話を聞こう」「決して否定しない」「逆に私たちに教えたくなるように話題を引き出してあげよう」と心がけています。

一 活動の幅をどうやって広げていったのですか?

地域は信頼関係が一番大事。会をつくった時は行政や社会福祉協議会、老人クラブの代表などを訪ね、「こういう思いで活動をしたい」と理解を求めました。すると家事援助やミニデイサービスの依頼が少しずつ増えていきました。会場単位で見ると、月1度ないしは隔月に1度の開催で、「もっとやってほしい」と言われます。体制ができた現在も、各地区の老人クラブの世話役やヘルパーさんが仲介役してくれます。助けあい組織というよりは、私たちのほうが助けられている組織です。

一 活動を支える原動力はなんですか?

会を始めた当初、ミニデイサービスに参加した人々が見せてくれた笑顔があまりにも素敵でやめられなくなりました。私たちは全員素人ですが、知恵を絞ってやってきたことがお年寄りに受け入れられ、喜ばれている。「不思議よね」と皆で言い合っています。でも、喜ばれるとますますやる気が湧いてくるものです。

一 会の後継者についてお聞かせください

会員は40〜70代ですが、中心は50代後半から60代。後継者づくりはこれからです。若い人は仕事を持っている人が多く、急にバンタッチするのは難しいですが、定年を迎え少し余裕の出た人にはピッタリだと思います。専任スタッフは月10日出勤、その他の人は週3〜5日と融通がききます。意味ある活動を続けていければ必ず受け継がれていくと前向きに考えています。

「皆で集まれば話はずむ」「和紙のひな人形。綺麗な仕上がりに、参加者も満足」「保健師の講話のあとは軽い運動。体を動かして、健康にも気を遣う」「壁に掲げられた仕事の訓示。「人と接する時は春のような暖かい心で」「弁当づくりに励む女性部のメンバー」「軽い運動で、指を動かす」「7 倉庫を改装した加工施設「つくしんぼうルーム」では和菓子づくり。地元産の材料をたっぷり使う

「財政悪化で診療科目が縮小する現状を目の当たりにし、私たちができることがないかと考え始めました」と会の荻野孝子会長(68)は言う。JA管内には、東栄町、設楽町、豊根村でミニデイサービスを展開するドレミの会も活動中だ。

つくしんぼうの会は、地域に暮らす人々を有機的に結び、役割も果たしている。食材は地元農家や直売所から仕入れて使う。市内の小学校に声をかけ、生徒たちがゆとり授業の時間を利用して、ミニデイサービス会場を訪れ、お年寄りに紙芝居を披露したり、一緒にゲームをしたりする。市内の障害者施設とも連携し、施設内で栽培するシイタケを会の弁当に使ったり、

「財政悪化で診療科目が縮小する現状を目の当たりにし、私たちができることがないかと考え始めました」と会の荻野孝子会長(68)は言う。JA管内には、東栄町、設楽町、豊根村でミニデイサービスを展開するドレミの会も活動中だ。

つくしんぼうの会は、地域に暮らす人々を有機的に結び、役割も果たしている。食材は地元農家や直売所から仕入れて使う。市内の小学校に声をかけ、生徒たちがゆとり授業の時間を利用して、ミニデイサービス会場を訪れ、お年寄りに紙芝居を披露したり、一緒にゲームをしたりする。市内の障害者施設とも連携し、施設内で栽培するシイタケを会の弁当に使ったり、

「財政悪化で診療科目が縮小する現状を目の当たりにし、私たちができることがないかと考え始めました」と会の荻野孝子会長(68)は言う。JA管内には、東栄町、設楽町、豊根村でミニデイサービスを展開するドレミの会も活動中だ。

つくしんぼうの会は、地域に暮らす人々を有機的に結び、役割も果たしている。食材は地元農家や直売所から仕入れて使う。市内の小学校に声をかけ、生徒たちがゆとり授業の時間を利用して、ミニデイサービス会場を訪れ、お年寄りに紙芝居を披露したり、一緒にゲームをしたりする。市内の障害者施設とも連携し、施設内で栽培するシイタケを会の弁当に使ったり、

「財政悪化で診療科目が縮小する現状を目の当たりにし、私たちができることがないかと考え始めました」と会の荻野孝子会長(68)は言う。JA管内には、東栄町、設楽町、豊根村でミニデイサービスを展開するドレミの会も活動中だ。

つくしんぼうの会は、地域に暮らす人々を有機的に結び、役割も果たしている。食材は地元農家や直売所から仕入れて使う。市内の小学校に声をかけ、生徒たちがゆとり授業の時間を利用して、ミニデイサービス会場を訪れ、お年寄りに紙芝居を披露したり、一緒にゲームをしたりする。市内の障害者施設とも連携し、施設内で栽培するシイタケを会の弁当に使ったり、

「財政悪化で診療科目が縮小する現状を目の当たりにし、私たちができることがないかと考え始めました」と会の荻野孝子会長(68)は言う。JA管内には、東栄町、設楽町、豊根村でミニデイサービスを展開するドレミの会も活動中だ。

つくしんぼうの会は、地域に暮らす人々を有機的に結び、役割も果たしている。食材は地元農家や直売所から仕入れて使う。市内の小学校に声をかけ、生徒たちがゆとり授業の時間を利用して、ミニデイサービス会場を訪れ、お年寄りに紙芝居を披露したり、一緒にゲームをしたりする。市内の障害者施設とも連携し、施設内で栽培するシイタケを会の弁当に使ったり、

「財政悪化で診療科目が縮小する現状を目の当たりにし、私たちができることがないかと考え始めました」と会の荻野孝子会長(68)は言う。JA管内には、東栄町、設楽町、豊根村でミニデイサービスを展開するドレミの会も活動中だ。

つくしんぼうの会は、地域に暮らす人々を有機的に結び、役割も果たしている。食材は地元農家や直売所から仕入れて使う。市内の小学校に声をかけ、生徒たちがゆとり授業の時間を利用して、ミニデイサービス会場を訪れ、お年寄りに紙芝居を披露したり、一緒にゲームをしたりする。市内の障害者施設とも連携し、施設内で栽培するシイタケを会の弁当に使ったり、

私たちJAグループの目指すもの» 新たな協同の創造

